様式Ｆ-１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 1 日現在

機関番号：12501
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011-2012
課題番号：23730647

研究課題名（和文） 強迫性障害における再保証を求める行動の認知行動療法的研究

研究課題名（英文） Cognitive behavioural investigation of reassurance seeking behaviours in obsessive-compulsive disorders

研究代表者
小堀　修（KOBORI OSAMU）
千葉大学・社会精神保健教育研究センター・特任講師
研究者番号：40436598

研究成果の概要（和文）：再保証を求める行動は、強迫性障害をはじめとする不安障害を持つ患者に多く見られる行動で、“不安を軽減させて安心するために、同じ情報を繰り返し要求する行動”と定義される。本研究では、再保証を求める行動を包括的に測定する質問紙の日本版を作成し、その信頼性と妥当性を検証すると同時に、再保証の求め方と気分の変化の関係を明らかにした。同時に、再保証を求められる側にある治療者と家族が、患者の再保証を求める行動に、どのように巻き込まれ、どう対処しているのかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Reassurance seeking is defined as ‘repeated behaviours to ask for the same information in order to deal with anxiety’, and it is typically observed in anxiety disorders such as obsessive-compulsive disorders. This study aimed to (1) develop a questionnaire in Japanese to comprehensively measure reassurance seeking, (2) test its reliabilities and validities, examine the relationship between reassurance seeking and changes in emotions. This study also elucidated the ways carers and clinicians are asked for reassurance, and the ways they deal with such reassurance seeking.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：認知行動療法

１．研究開始当初の背景

再保証を求める行動(Reassurance Seeking Behaviour)は、“不安を軽減するために、同じ情報を繰り返し要求する行動”と定義される。不安が高くなれば、誰でも再保証を求めるが、強迫性障害(OCD)を始め、不安障害を持つ患者は、この再保証を求める行動が過剰になる。例えば「自分の手がきれいか」家族や治療者に同じ質問を繰り返したり、家族を儀式に巻き込んだり (成田, 1987)、記憶やメモを何度も確認したりする。これらは病気の回復を妨げるだけでなく、家族に多大なストレスを与えたり、治療同盟が損なわれる要因となる。

申請者は英国ロンドン精神医学研究所で、この再保証を求める行動について、以下の研究を進めてきた:

(1) 自己報告式尺度の開発と質問紙調査

まず、再保証を求める行動を包括的に測定する Reassurance Seeking Questionnaire (ReSQ) を開発した。ReSQ は、再保証を求める行動について、5 つの側面を包括的に測定

する。
この ReSQ と妥当性を検討するための質問紙を英国人 250 名 (OCD 患者, パニック障害患者, 健常者) に実施した。項目分析、因子分析、相関分析を経て、尺度の信頼性と妥当性が検証された。
また、グループ間の比較を行うことで、他のグループと比べ OCD 群は、より頻繁に、より強い強度で、より注意深く再保証を求めることが明らかとなった。

(2) 再保証が OCD 患者の洗浄強迫に与える効果を検討する手洗い実験
次に、OCD 患者の手洗い行動が、再保証によって短期的・長期的にどう変化するかを検討した。
この実験では、洗浄強迫を持つ OCD 患者 46 名が、実験刺激(プラスチック製の犬の糞)を触り、再保証を与えながら手を洗った後に、再び実験刺激を触り、再保証のない状況で手を洗った。
その結果、再保証のない状況において、手洗い時間が長くなることが明らかとなった。つまり再保証が与えられると、長期的には逆効果であることが明らかとなった。

(3) OCD 患者が再保証をどう求めるかについての質的研究
10 名の OCD 患者に半構造化面接を行い、得られたデータを主題分析 (Thematic Analysis) を用いて質的に分析した。その結果、確実性の追求、注意深い努力、再保証を求めることへの抵抗、対人的懸念の 5 つのテーマが抽出された。これらのテーマはそれぞれ下位テーマを持ち、相互関係を持っていた。

２．研究の目的
本研究では、再保証を求める行動を包括的に測定する質問紙の日本版を作成し、その信頼性と妥当性を検証すると同時に、再保証の求め方と気分の変化の関係を明らかにした。同時に、再保証を求められる側にある治療者と OCD 患者を持つ家族が、患者の再保証を求める行動に、どのように巻き込まれ、どう対処しているのかを明らかにした。特に、以下のリサーチクエスチョンを明らかにした:

(1) 日本版 Reassurance Seeking Questionnaire (ReSQ-J)が、英国版と同様の、信頼性と妥当性を持ちうるか
(2) 同時に、短期的な不安の低減と、長期的な不安の増加に影響する変数を特定し、再保証のどのような側面が強迫行為と同様の機能を持つか
(3) ReSQ-J を OCD 患者、うつ病患者、健常者に実施し、日本の OCD 患者は、うつ病患者、健常者と比較して、より頻繁に、より繰り返し、より注意深く再保証を求めるか
(4) OCD 患者の家族が、どのように再保証を求められており、どのように対処しているか
(5) 治療者が、患者からどのくらい再保証を求められているか、どのように対処しているか

３．研究の方法
(1) ReSQ 日本語版の作成と群間比較
英語版の ReSQ は、再保証を求める行動について、頻度、信頼、強度、注意深さ、気分の変化の 5 つの側面を測定することができる。

- 頻度: 家族・治療者・自分の記憶・メモ・本・ウェブなどの各情報源から、どのくらい再保証を求めるか。
- 信頼: 家族・治療者・自分の記憶・メモ・本・ウェブなどの各情報源を、どのくらい信頼しているか。
- 強度: 再保証を求め始めるときに、同じ質問を何度繰り返すか
- 注意深さ: 相手の回答に矛盾がないかを考えようとするなど、どのくらい意図的な努力を行なうか。
- 気分の変化: 再保証を得たとき・得られなかったとき、不安等の気分が短期的・長期的にどう変化するか。

ReSQ を日本語へ翻訳し、英語へ逆翻訳して原版との比較は完了している。日本人大学生を対象とした調査にて、日本版 ReSQ の信頼性と妥当性を検証した。同時に、短期的な不安の低減と、長期的な不安の増加に影響する変数を特定し、再保証のどのような側面が強迫行為と同様の機能を持つかを明らかにした。
次に、ReSQ-J を OCD 患者、うつ病患者、健常者に実施し、群間で得点を比較した。OCD 患者とうつ病患者、健常者に再保証を求める頻度と信頼に差はないと予想された。一方で、OCD 患者は、強度と注意深さにおいて、うつ病患者や健常者よりも高い得点を示すことが予想された。

(2) 患者と治療者の体験
まず、OCD 患者を持つ家族 5 名に 30 分程度の半構造化面接を行った。インタビューはテープ起こしを行って、そのスクリプトを主題分析(Thematic Analysis)を用いて質的に分析した。インタビュースケジュールの概要は以下の通りであった:

- どのような再保証を求められるか？
- どのように再保証を与えるか、もしくは与えずに対処するか？
- 再保証を与えるとき、与えないときに、患者や家族自身の気分がどう変化するか？
- 家族が再保証を与える動機づけ、理由は

何か？

次に、申請者が英国で作成した治療者用 ReSQ を翻訳・改変し、日本人で、強迫性障害の治療経験のある者 20 名を対象に調査を行なった。質問紙の概略は以下の通りである:

- どのような再保証を求められるか？
- どのように再保証を与えずに対処するか、もしくは与えてしまうか？
- 強迫性障害患者は、どのくらい再保証を求めていると予想するか？
- 再保証を繰り返し要求されている家族にどうアドバイスしているか？

４．研究成果

(1) ReSQ 日本語版の作成と群間比較

日本人大学生129名を対象とした調査にて、日本版 ReSQ の信頼性と妥当性を検証した。

次に、ReSQ-J を OCD 患者 32 名、大うつ病患者 17 名、健常者 24 名に実施し、群間で得点を比較した。その結果、OCD 患者とうつ病患者は、健常者よりも、再保証を求める頻度、信頼、注意深さが高いこと、OCD 患者は大うつ病患者と比べて、自己再保証をより頻繁に用いていること、再保証を求める強度において高い得点を示すこと、再保証が手に入らないときにより高い衝動を体験していることが明らかとなった。

(2) 患者と治療者の体験

平成 25 年度ではまず、OCD 患者を持つ家族 5 名に 30 分程度の半構造化面接を行った。インタビューはテープ起こしを行い、そのスクリプトを主題分析(Thematic Analysis)を用いて質的に分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

当事者が再保証を求めることを止めようとがんばっていることを、家族もよく分かっている。家族は再保証を求められると、「ばかばかしい」「止めて！」と言いたい気持ちを必死で抑えている。家族は、本来であれば再保証を与えないほうがよいことは分かっているが、当事者に「私のことなんてどうでもいいんだ」「私ではなくて OCD がこうさせているんだ」と言われてしまうと、再保証を与えざるを得なくなってしまう。再保証を与える代わりに、別の見方や考えかたを、当事者と話し合おうとするが、うまくいくことは少なく、言い争いになってしまうこともある。議論を続けるよりは、再保証を与えて、次に進みたいと家族は願っている。

日本人で、強迫性障害の治療経験のある者 28 名を対象に調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

ほとんどの治療者が、直接的に再保証を求められた経験があるが、間接的に求められた、求められていることに気づいた治療者は、3 分の 2 だった。また、強迫性障害を持つ患者に対して、「全く再保証を与えたことはない」と答えた治療者は 3 名に過ぎず、多くの治療者は、再保証を与えたことがあると回答していた。再保証は全く与えてはいけないというものではなく、状況に応じて患者に保証を与えることが必要であることが明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

1. 小堀修. (2013). 確認強迫の認知モデルと認知療法の一事例. 行動科学, 51, 99-106.

2. Stoeber, J., Kobori, O., Tanno, Y. (2013). Perfectionism and Self-Conscious Emotions in British and Japanese Students: Predicting Pride and Embarrassment After Success and Failure. European Journal of Personality, 27, 59-70.
DOI: 10.1002/per.1858

3. Kobori, O., & Salkovskis, P., M. (2013). Patterns of reassurance seeking and reassurance-related behaviours in OCD and anxiety disorders. Behavioural and Cognitive Psychotherapy.41, 1-23.
http:/ / dx.doi.org/ 10.1017/ S1352465812000665

4. Kobori, O., & Tanno, Y. (2012). Self-Oriented Perfectionism and its relationship to Selective Attention. An experimental examination using social cognitive paradigm. Japanese Psychological Research, 54, 418-423.
10.1111/j.1468-5884.2012.00514.x

5. Kobori, O., Salkovskis, P., M., Read, J., Lounes, N., & Wong, V. (2012). A qualitative study of the investigation of reassurance seeking in obsessive-compulsive disorder. Journal of Obsessive-Compulsive and Related Disorders, 1, 25-32.
http:/ / dx.doi.org/ 10.1016/ j.jocrd.2011.09.001

6. Kobori, O., Yoshie, M., Kudo, K., & Otsuki, T. (2011). Traits and cognitions of perfectionism and their relation with coping style, effort, achievement, and performance anxiety in Japanese musicians. Journal of Anxiety Disorders, 25, 674-679.
http://dx.doi.org/10.1016/j.janxdis.2011.03.001

7. Kobori, O. (2011). Cognitive therapy for vomit phobia: A Case Report . Asia Pacific Journal of Counselling and Psychotherapy, 2, 171-178. 10.1080/21507686.2010.524237

以下は査読なし
8. 清水栄司, 小堀修. (2012). 認知療法尺度-改訂版の活用 臨床精神医学（アークメディア）第 41 巻第 8 号; 969-979.小堀修 2011 一月三舟でも要は GOAL: 大学生アスリートの腰痛に対する認知行動療法. Monthly Book Medical Rehabilitation, 138, 17-24.

9. 小堀修・西村理晃 2011 住み分けずに棲み分けるー英国の認知行動療法と精神分析的心理療法ー. 精神科治療学, 26, 301-307.

10. 清水栄司・小堀修 2011 認知行動療法セラピストの教育訓練と活用：精神医学の立場から—英国モデルを千葉に—. 精神療法, 37, 21-28.

〔学会発表〕（計 4 件）
1. Kobori, O., Salkovskis, P., Read, J., Lounes, N., & Wong, V. (2011). A qualitative study of the investigation of reassurance seeking in obsessive-compulsive disorder. Symposium “Cognitive behavioural therapy for obsessive-compulsive disorder. Development and enhancement”. European Congress of Behavioural and Cognitive Therapy, Reykjavik, Iceland, abstract p119.

2. Pagdin, R, Kobori, O., Salkovskis, P., & Read, J. (2011). A qualitative study of the investigation of reassurance seeking in obsessive-compulsive disorder. Symposium “Cognitive behavioural therapy for obsessive-compulsive disorder. Development and enhancement”. European Congress of Behavioural and Cognitive Therapy, Reykjavik, Iceland, abstract p119.

3. 小堀修. 小間物には困ります: 嘔吐恐怖に認知療法が奏効した事例研究. 日本不安障害学会, 2011 年 2 月 名古屋.

4. 小堀修. 認知行動療法のトレーニング: 英国と千葉. シンポジウム「心理師が行う認知行動療法の保険点数化にむけて」. 日本心理学会, 2011 年 9 月, 東京.

〔図書〕（計 2 件）
1. 小堀修 2013 不安の認知理論と嘔吐恐怖の認知療法—小間物に困ったら. 貝谷久宣(監修), 野呂浩史 (編集) 嘔吐恐怖症 基礎から臨床まで. 金剛出版, pp148-172.

2. 小堀修, 沢宮容子, 勝倉りえこ, 佐藤美奈子 2012 臨床実践を導く認知行動療法の 10 の理論 「ベックの認知療法」から「ACT」・「マインドフルネス」まで. Nikolaos Kazantzis, Mark A. Reinecke, Arthur Freeman. (2010). Cognitive Behavioural Theories in Clinical Practice. 星和書店.

６．研究組織
(1)研究代表者 小堀 修 (KOBORI OSAMU)
千葉大学・社会精神保健教育研究センター・特任講師
研究者番号：40436598